

## 博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名 凌 一葦  
学位 博士 (医学)  
学位記番号 新大院博 (医) 第 567 号  
学位授与の日付 平成 25 年 9 月 20 日  
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当  
博士論文名 中学生・高校生の母親が持つ統合失調症へのスティグマの決定要因に関する研究

論文審査委員 主査 中村 和利  
副査 赤澤 宏平  
副査 染矢 俊幸

### 博士論文の要旨

#### 背景

統合失調症の初期症状は中学生・高校生に出現する場合がある。その初期症状を見逃さないためには、中学生・高校生の親たちが彼らの心身の状態やその変化に細心の注意を払う必要がある。一方、本人もしくは親たちが持つ統合失調症に対するスティグマ（社会的烙印）は、この初期症状の否認と受診回避の一つの原因となりうる。日本の家庭では、父親に比べて母親が子供の育児にかかる時間が長いことが知られている。そこで、本研究は中学生・高校生を持つ母親を対象として、統合失調症へのスティグマの高低に影響する因子を統計学的に探索した。

#### 方法

本研究のアンケート調査の対象は、中学生・高校生を持つ 38 歳から 57 歳までの母親 1225 例である。本研究の解析に用いた人口統計学的な因子は 11 因子である。すなわち、母親のアンケート時の年齢、子供の学籍、母親の学歴、アンケート時の居住地、配偶者の有無、家族構成、職業、雇用形態、世帯年収、統合失調症の人との接触経験の有無、および、精神保健福祉活動に参加した経験の有無である。中学生・高校生を持つ母親が統合失調症に対して抱くスティグマの程度を計測するために、Link スティグマ尺度修正版を用いた。データ解析は単一因子解析と多変量解析の両方が行われた。複数の群間での平均値の有意差検定は、Welch の t 検定、Student の t 検定、および、分散分析 (ANOVA) により行われた。Link スティグマ尺度の合計スコアの高低に有意な影響を及ぼす因子の抽出には、逐次変数増加法による重回帰分析を用いた。

#### 結果

対象者 1225 名のうち 89.7%の母親は年齢が 50 歳未満であり、大学卒業以上の最終学歴を持つ母親は全体の 22.1%であった。また、就労形態が常勤以外である母親は全体の 83.3%、世帯年収が 500 万円以上である母親は全体の 69.5%であった。統合失調症の人との接触経験をもつ母親は 3.2%、精神保健福祉活動に参加した経験がある母親は 8.3%であった。

スティグマの程度に影響を与える因子を抽出するために、単一因子解析を行った結果、配偶者ありの母親の合計スコアの平均値は配偶者なしの母親のそれに比べて有意に低く、職業が情報通信・運輸および専

業主婦の合計スコアの平均値は他の職業に比べて低かった。また、統合失調症の人と接触経験がある母親は経験がない母親、ならびに、精神保健福祉活動に参加した経験がある母親は、経験がない母親に比べて合計スコアの平均値が有意に高い値を示した。

さらに、人口統計学的な因子を候補因子とする重回帰分析を行った結果、Link スティグマ尺度の合計スコアを高める要因として以下の4因子(現居住地が東海・近畿以外である、配偶者なし、職業が医療・教育関連もしくは公務員である、統合失調症の人と接触経験あり)が有意水準5%で有意な因子として選択された。

## 考察

これまで居住地は、スティグマの増長要因として他の研究ではほとんど言及されていないが、本研究の結果、東海・近畿地方においてスティグマのレベルが低かった。この理由として、この地域では、法務省の統計では地域住民に対する在留外国人の比率の高い地域であり人種の違いによる偏見を回避しながら生活する環境が整っていること、さらに、大阪府教育委員会が、人権問題全体を扱う副読本を無償配布して人権問題に深く取り組んでいたという地域の特性が精神疾患に対するスティグマを低減させている可能性が考えられる。

配偶者なしの母親は社会的に差別や偏見の対象となりやすく、スティグマを受ける可能性が高いが、このような差別や偏見を受けた経験を持つ被差別者が「複合差別」により、差別者に転じた可能性もある。さらに、スティグマを高める因子の中で、配偶者なしの母親や職業として医療従事者、教育関係者および公務員である母親に対して、適切な啓発活動を行うことによりスティグマを下げる可能性があると考えられる。

さらに、統合失調症の人との接触経験のある、または、精神保健福祉活動に参加した経験のある母親は、経験がない母親に比較してスティグマのスコアが高いことが示された。このことは、実際に統合失調症の人に接した際に、統合失調症の人が「自分のことを監視している」など誤った確信を持つことに反感を持った経験などの後では、患者へのスティグマは良くないと理性では認識しつつも、気づかぬうちに反感を持ったり、気味悪く思ったりすることが原因である可能性がある。

## 結論

本研究では、中学生・高校生の母親が持つ統合失調症へのスティグマを高める因子として、居住地(東海・近畿地方以外の居住)、配偶者なし、職業(医療・教育・公務員)、および、統合失調症患者との接触経験あり、が明らかになった。この結果から、配偶者なしの母親や職業として教育関係者、医療従事者および公務員である母親に対して、適切な啓発活動を行うことにより統合失調症の初期症状の否認と受診回避の原因となりうるスティグマを下げる可能性が示された。

### 審査結果の要旨

本論文は、思春期の子供をもつ母親が統合失調症に対して抱くスティグマ(社会的烙印)のレベルに影響する因子の探索を行うことを目的とした。

対象は、中学生または高校生を持つ38歳から57歳までの母親1225人であった。対象者の年齢、子供の学籍、母親の学歴、居住地、配偶者の有無、家族構成、職業、雇用形態、世帯年収、統合失調症の人との接触経験の有無、精神保健福祉活動に参加した経験の有無についての情報を得た。スティグマのレベルの計測にはLink スティグマ尺度修正版を用いた。

重回帰分析を行った結果、Link スティグマ尺度の高スコアに関連する要因として、居住地が東海・近畿以外であること (P=0.016)、配偶者なし (P=0.040)、医療・教育関連または公務員の職業 (P=0.008)、統合失調症の人との接触経験あり (P=0.004) が選択された。

本論文は統合失調症スティグマの関連要因を明らかにした。スティグマレベルの高い集団に対して適切な介入を行うことにより、若年者における統合失調症の早期発見・受診が期待され、この点に学位論文としての価値を認める。